
ド三流!!

あじ人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ド三流！！

【Zマーク】

Z5290X

【作者名】

あじ人間

【あらすじ】

路頭にさ迷つていた所を拾つてくれたお嬢様。

そのままなし崩しに執事をする事になつた俺こと上城 瞳月。

一般庶民代表の俺が超セレブ学園に乗り込むことにー？
金持ちの世界つてのは現実離れしてて困るぜー！

第一章 お嬢様も一般庶民？

「これは俺がお嬢様に拾われた時の話しだ

執事として雇われた俺は何の問題もなく仕事をこなしていた・・・
そう俺にはなんの問題も無かつたんだ・・・
問題は・・・俺の周りに溢れかえっていた

「どううしょお～

ほり、また問題が・・・

【一般庶民なお嬢様？】

・同日数刻前・

「はい、ご苦労様です」

荷物を受け取った俺は持ち主の部屋までそれを届けるのだが、いつ見ても広い家だ・・・

いや、屋敷と言つんだっけか、早い話が豪邸だ、まったくこんなデカイのに住人は俺を含めて2人つて・・・
おっと、こいつを早いとこ届けないとな。

「コンコン

「お嬢様～荷物届きましたよ～」

おや、返事がないな、まだ寝ていいっしゃるのかな？

つていつてももう毎の～時だけれども……………これじゃまたいつもの
お決まりのセリフが出るな。

「入りますよ～」

お～寝てる寝てる 気ままな猫みたいだ、とてもじゃないがお嬢様
とは程遠い、実際お嬢様つてわけではないが……………いちよつはお嬢様
の部類に入るのか？

「起きて下さい、朝ですよ～」

実際は昼間だが小さことこには戸をつむり、それが一流の執事の
勤めだ。

しかし、なかなか目を覚ましてくれないな、こには一発ベッドから
叩きだすか。

え？一流の執事はそんなことしないって？わかつてないな、これも
一流の証なのだよ……

嘘じやないよ？本当だよ。

あ、信じてないな？今から見せるからしかとその戸……
どうやら起きたようだ。

「お目覚めですか？」

あ～あ、髪もボサボサ、目もショボショボさせてるよ、あ、時計見
た、おつ真つ青だ、そろそろ耳でも塞いでおくか。

「きや――――――！」

「おはよつゝじこます、お嬢様」

朝から大きな声を……

ん、だから小わいじとは氣にしないって言つたでしょ？

「荷物届いてますよ」

あんなに楽しみにしていたのに昨日爆睡なんて、興奮して眠れなかつたのか？

いやいや、それは無い、小学生じやあるまいし、もつ高校生活も一年目になるじゃないか、いや待てよ、胸だけは小学生並か……

「ちよつと小さいかな？」

「いや、ちよつとびこりじや……」

「え～サイズちゃんと合わせたのに～」

「あ、いや、お似合いアル」

やばっ、今日届いたドレスの話か。

さつそく開けてるし。

てか、わっさの俺の語尾おかしくなかつたか？

うわっしつれ睨んでるよ、とりあえず退場しておくか。

「それでは、私はこれで失礼します、もつすぐパーティーも始まりますので支度しといて下さい」

「は～い、睦月もね」

ふう、なんとか乗り切つたようだな、パーティーまで後2時間あるし、それだけあればさすがのお嬢様でも間に合つだらう。しかし俺もつてなんだ？

”ピンポーン”

ん、また荷物か何か？今日頼んでおいたものはもう届いてるし、とりあえず考えるのは訪問者を迎えてからでいいか。

「ムツキ様宛てにお荷物お届けに参りました～……………ありがと

「ひじりいまーす」

何だこれ？受取人が俺になつてゐる……
とりあえずお嬢様に持つて行くか。

”コンコン”

「お嬢様——また荷物届きましたけどお——」

「あつ、それ睦月宛てじゃない？」

やつぱり俺のだつたか。

しかし最近注文した覚えなんて無いし、そんな記憶もない。
ま一開けてみればわかるか、こんな廊下で開けるのもなんだし部屋
に戻るか。

「入つていいよ」

なんてタイミングのいいこと。

つてドアの隙間から覗いてんのまる見えなんですけど……
なんか嫌な予感がする、とりあえず入るか。

「これ俺のなんスか？」

「そうだよ、私が頼んでおいたの、開けてみてよ~」

”ゴソゴソ”

ん、新しいスース？なつ超ハイブランド品じやん、なんで？今日、
誕生日でもないし……

「今日のパーティーはそれ着てつてね」

ん？まだだ。

確か今日のパーティーはお嬢様の学友の誕生日会だったはずだが。
ま一俺のクラスメイトもあるが。

まさか……

うわつこつ見てニヤニヤしてゐるよ、ありや確信犯だな。

「あの、やつぱり俺も行かなきゃいけない？」

「うん、ほら招待状2枚あるし」

「・今までその招待状、隠してたよね？」

「だつてそうしないと参加しなかつたでしょ？」

そりやそうだ、なんせ俺たちの通つてる学校は、1・2を争う超が付くセレブ校（男女共同）正直住む世界が違う。そんな生徒が開くパー・ティーなんて場違いもいい所だ。しかも今日の主役はその中でもダントツの究極セレブ、生徒会長、兼、理事長の孫！！やつてられるか。

「たつた今、急用を思い出しました。辞退します。」「嘘つき」「私だけ恥かかせようなんて、そうはいかないんだから」

「知らんわ！！一人で行け一人で」

「絶対イヤ！！一緒に行くの～私一人だけ空気違うもん、睦月だけが味方なんだもん、睦月だつて知つてるでしょ？私だつて拾われたんだもん、いきなりお嬢様になつたんだもん」

「え～い分かつたから服をひっぱるな、俺だつて似たよつもんだ、しかも拾つたのは他でもないお嬢様だろーがー」

「じゃあ一緒に行つてくれるの？」

「お嬢様一人じゃ不安なんでついて行きますよ庶民同士見事に散りに行きましょう」

「できれば散りたくないな～」

いやーそれはしかたないでしょ、だつて俺たち一般庶民なんだしさ。……ん？言つてなかつたつけ？なら今から言つけど俺もお嬢様も元は一般庶民だつたんですよ。

まあタイトルに書いてありますが……

ま～いい、ちょっと訳ありで路頭に迷つっていた所を俺はお嬢様に、お嬢様は今の奥様と旦那様に迎えて入れられた訳。

ちなみにその2人は海外出張中で、俺たち2人はお留守つて」と。
つまり俺たちは超庶民的なのだ！！

「ほら、早く準備しよ～お迎え来ちゃ～つよ」

これから始まる俺たちの戦い……とりあえず問題だらけなのは確かだ。

”ガシャン”

「あつ、キヤ～招待状に紅茶こぼしちゃつた！！

ど～う～し～み～

完

第一章 一流のパーティー

広さにして約12畳。

ふかふかのソファーアーは体が今にも飲み込まれそうで、添え付けの高級紅茶とシフォンケーキはこれからの2人を祝福するシンフォニー。

なのに隣に居るレディーは何故か不安気な表情。

無理もないか……

こんなリムジンに乗せられたんじゃ……な。

第一章

「広いね~」
「広いですね~」
「長いね~」
「長いですね~」

かれこれ数時間、車に揺られながら会場まで連行……もとい送迎されている、ピカピカのスーツとドレスを身に纏つた哀れな馬子2人組。

これから始まる戦争……もといパーティーに不安を抱えながら、ついでにプレゼントも抱えている。

「プレゼント用意したんだね？」

「何も無い訳にはいきませんからね、急いで用意しましたよ」

「私が言つのも何だけど、よく用意出来たよね、プレゼント何にしたの?」
「当然秘密です、とりあえず生徒会長が見たことも無

い「ゴイスなプレゼントとだけ言っておきます」

いや、嘘は言ってない。迎えが来る残り5分間で頭を回して回して
考えた品だ。

そもそも時間が無く、部屋にあるものから超セレブである生徒会長
のお気に召すアイテムを探すことなど不可能なことをやつて退けた
俺を贊美し褒め奉つてほしいぐらいだ。「そういうお嬢様は何に
なさつたんですか?」

どうせお嬢様の考えることだ、その辺にある雑草と同レベルだろう。
まだ鹿しか食わん鹿せんべいの方が良い物に決まつている。

ああ、そうだ。お嬢様の頭の回転など三輪車の回転数にも劣る。
さあ言つてみる、その明らかに一足歩行より遅い乗り物の頭で考え
たプレゼントを……

「え、なんか恥ずかしいな、私、じく考えたんだけどね、いざ渡
すとなるとやつぱり……」

「確かに鹿煎餅はどうかと思いますよ」

「何? 鹿煎餅つて? 瞳月はそんなの持つてきたの? 私はカツプラ
ーメンだよ、やつぱりやめた方がよかつたかな?」

そ、そんな馬鹿な!?

まさかのミラクル!?

完全にかぶつた……

三輪車は俺の方だったか……いや、そんなことは今はどうでもいい、
チームムツキーズ(構成2人)が2人揃つてプレゼントにカツプ麺
つて……

まー有りか無しかで言えば……ありだな、うん。

「とても素敵なプレゼントですね、きっと会長もお喜びになると
思いますよ」

ああ、本当にそう思う。

なにせ三輪車ブラザーズが2人して選んだ物だ、喜ばないはずがな

۱۱

それに超セレブの会長のことだ、演技の一つでもして喜ぶだらう……頼んだぞ会長。

「到着致しました」

運転手の案内で長い道のりもようやく終点を.....迎.....え

「何!? どうして!?

ほらあれだ、海外にある、ほらあれ、そうあれ、バツキンダム宮殿。

「ここですか？」

ですか。

ちなみに『御影』というのは会長の名字だ。
フレデリック・アーヴィングの『御影』。

才色健美、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人。

しかし性格が悪いのか欠点中の欠点、
あ、俺が言つたのは内緒にしてね。

とりあえず目を付けられると厄介なタイプ。

お嬢様とは何故かは知らんが仲が良く、俺とは何故かは知らんが敵意を向けられている。

くわばり、くわばり。

「二つ見ても凄いよね～って、睦月君はどこに行こうとしてるの

かな？」

「いや、家に忘れ物をしたので取りに帰るつかと、歩きで」

「やうやうのを逃・げ・るつて叫ぶだよ、ソレまで来て帰るなんて男じこじゃないよ。」

「うふふ～ん」

「……それ、繭ちゃんの前でやつてみてくれない？」

「どうやら我主から死ねとの御達しが出たようだ。
それまでキモかつただろ？」

「招待状はお持ちですか？」

「はい、持つてます、ちよつと待つて下さい、今出しますの……」

どう見ても紅茶色の招待状が2枚……ついでにクッキーでも出せつ
か？

「近衛様（お嬢様）と上城様ですね、よつこお越し下さいま
した、どうぞいらっしゃく」

ははは、会場までは庭専用車に乗り換えですか？

そうですか、広いですもんね。
はあ、帰りたい……

会場はすでに賑わいを見せていた、所々にクラスの奴らも見受けられる。

「みんなもう来てるみたいだね、ちゃんと挨拶ぐらいはしてよね」「わかつていますとも、こう見えても私は近衛財閥の一流執事なので、お嬢様の顔に泥を塗る様な事をするはずが……」

・・・・・何故睨む？

「お願いだからこれ以上恥をかかせないで、ただでさえクラスでちょっと浮いてるんだから」

「ははは、クラス最初の自己紹介で特技と称して「アレ」をやつた時はさすがに庇いきれませんでしたからね」

「や～め～て～思い出させないでよ～それに、それを言ひなら睦月の自己紹介だって酷かったじゃん、同じレベルだよ」

「何をおっしゃっているか解りかねますね、私の高貴なる特技を貴方の「アレ」と同レベルなどと」

「なら今日のパーティーでもう一回披露してみせてよ」

「い、いいですとも、私がどれほど優れているかその田に焼き付けて下さいよ、あの冷徹仮面の生徒会長ですら「今日の主役は貴方よ」って言わせて見せますよ」

「……」

「そもそも、高貴なる私のセンスが人の面を被つただけの鬼会長に理解出来ればの話しだすがね」

ふふふ、決まった。

どう見ても今の俺はカツコ良すぎただろ。ほら見る、口が開いたまま、ほつけているお嬢様の顔を…！…あれはようやく俺を一流だと認めた顔だな間違いない。給料ヒュ確定…ひやつほ

「そこ」の三流

「む、誰だ…？お嬢様をバカにする奴は…確かにこんな間抜けな顔をしているが、こんななんでも我主であるぞ、名を名乗れえい！」

！

「睦月減給ね

な、バアカなあーーー！

つい声に出してしまった。

昼飯抜き……1週間……確……定……

「減給なんて温いわ、いつそクビにしてしまったら？新しい執事なら私が用意するわよ？もちろん”一流”的”のをね」

「待て待て待てえーい、どこの馬の骨かは知らんがわが主を侮辱したあげく、この私をクビにしうなどと……お嬢様…この者に制裁の許可」

「…………

「…………

「…………

「や、お嬢様、劇の練習はこれぐらにして皆様に挨拶をしに行きましょう

「苦しいわよ」

「繭ちやん、おめでとー」

「ありがとう瑞穂（お嬢様の名前）わざわざ遠ごとこひの感謝するわ、とこりで、そこの三流は何しに来たのかしり。」

「わちひと繭羅お嬢様を祝いに馳せ参じました、本日は、おめでとへいざります」

「あら、てっきり私に制裁をしに来たのかと思つたわ」

冗談キツイわ、猛者ばかりこる左手部の中で主将を努めてる相手に一戦交えて見る、クビにされる首すら残らん……

ここは……お嬢様に救いを求めよう。

このままじゃ棺桶行きの切符を拳で渡されかねん。

ここはひとつカツコは悪いがお嬢様に助けてもらひしきない。しかし会長がそんな暇を『えてくれるだらうか？』いや無い、まあ無い。

一言発しただけで即ち無阿弥陀物、棺桶まっしへり。

ここは俺とお嬢様の深い絆を信じアイコンタクトで意思を伝える。チャンスは一度、失敗は死を表す……

目が合つた！――

届けマイハート――

「繭ちやん」

よし届いた！

さすがお嬢様あ、一生着いて行きまふう

「私の分も追加でやつちやつて」

「…………」

この後、『尻が十字に裂けるまで終わらない蹴り』を喰らいながらも無事に仕事を果たすことが出来た。
それが一流つてやつだ。

……明日の学校、行けるかな……

第二章 一流の友達？

授業つて退屈じゃない?

この先、生きていく中で必要性のないことばかり教え込まれても迷惑だよね。そもそも何だよ……

ラクダの操縦授業つて

第三章

「おひ喧、おひ喧」
どうからか怪奇な歌声が聞こえる。

誰だ俺の睡眠を妨げる奴は

?

—
Z
Z
Z
Z
•
•
•

「お食いの順序」

「キシヨイわね

「イタタタタツだ、誰だ、俺の安眠を邪魔する奴は、ああ！！夢

と/or がって「」と言ふと、会長に勝利してたんだぞ。それをものごと見事にふせぎ壊しや

「それで悦つてた訳ね」

元へ

この後、会長に扱かれたのは言うまでもない。あくまで夢は夢でしかないと言つ事を知った。

「んじゃ、食堂にでも行きますか」

「今日は何にしようかな~」

「お嬢様には気まぐれセットをオススメする」

「あれば嫌あ、夏休み前に睦月がチャレンジしてたけど得体の知れないスライムが出てきたよね?」

「ははは、たまに特上寿司とか出るらしいぞ」

「ハイリスク、ハイリターンだよね、私は普通のでいいや」
食堂に向かいながらたわいもない話しが盛り上がりつつある。

ただ不自然な点と言えば足音が一つ余計に聞こえること……

「お嬢様、後ろから付けてくる彼女はいつたい?」 「繭ちゃんのこと? お昼一緒につて誘つたんだよ」

「何よ悪い?」

悪いも何も、さつきから黙つてゐるわ、不機嫌だわで一体何が楽しくて誘いを受けたんだか。

「2人は何食べる? 私は惣菜定食にしようと思つただ

「俺は適当なパンかな」

「ヨーグルト」

「え~~~~!...繭ちゃんそれだけなの? ちゃんと食べなきゃ倒れちゃうよ?」

「ふつふつふ、俺は知つてゐる。

会長の鞄の中にカツブ麺(あの銘柄は俺のチョイス)が入つていてることを。

後でこいつそり食つのだらうつな

”昼食タイム”

「今日は2人に頼みたいことがあるの

「ガツガツ、モシャモシャ」

「頼みつて？」

「生徒会の手伝いをして欲しいのよ、人手が足りなくて」

「バクバク、モフガツ」

「……それで2人にお願いを……」

「ガツモシヤ、ゴキュゴキュ……モフツモフガツガツ」

「睦月！——繭ちゃんが困ってるんだから少しばかり聞いてよね」

「ゲフー、人手が足りないって言うけど、もともと生徒会に会長以外の役員ついていたつけ？」

「いないわ」

「えつ繭ちゃん一人なの？」

「たしか全員逃げ出しちたって聞いたぜ」

まゝしかたがない、生徒会に入つて来る者全てが会長田口でか、内申目的の奴らだからな。

そのうえ使い物にならないんじや会長のシゴキには堪えられんだろう「使えない者を置いといても邪魔なだけよ、それと私も時間があればいいのだけれども他校との試合が控えてるから」

「そつか、部活忙しいんだね」

「そうなのよ、先方がどうしても私を抜きにして試合がしたいって、泣き付かれてしまって……」

どれほどの屍を積み上げて来たら一介の生徒を除外したがるのだろうか？

「わかった私達に任せとよ……」

おいおい、その自信はどうから湧いてくるんだ？
まだ仕事の内容すら聞いてないんだぞ？

「私達がいれば大丈夫だよ、繭ちゃんは相手をやつつける」とこの専念してね

それが出来ないから会長が苦労してんだる？はあ、とりあえずお嬢様が心配なんで引き受けます

「2人共ありがとう、早速今日の放課後に生徒会室に来てくれる

「「「」」解」」

現在授業時間中。

正直勉強なんか興味は無いし、ろくに話すより聞いていなかつたりする。

だからあえて言おひ。

「暇だ」

廊下をぶらつきながら、ぼやいているが決してサボりではない。授業開始2分で自習になつたのだ。

原因は先生の食中毒、昨日食べた蛙が当たつたらしい。

つーかそんなん食うなよ。

「図書室で寝るか」

基本的には教室から出ではいけないのだが仕方がない、あまりにも寝付けなかつたのだ。

図書室はやっぱり静かだった。

誰も居ない、授業中だから当然でむしろ居た方が怖いが。なんせセレブ校だ、授業をサボる奴なんて……いた！？

「.....」

「え~っと、こんなにちわ？」

「えっは、はいっ、こんなにちわ

ペコリとお辞儀をしているのはいが何故ここここなの……わから

ん。

「あ～俺、2年の上城つていうんだけど……君は？」
「ひやいつ、私は**天海**あまみ由つていいます、1年です」

「あ～由ちゃんね～、どつかで聞いたこと、いや見た?」「や」と?

いかん記憶が曖昧だ。

「あの、もしかして先輩も、その、優待生……ですか？」
「ん? 優待? もしかして……」

「君つて今噂になつてる授業免除の天才君?」

「天才かどうかは知りませんが、いちよう優待者に当たります」
あ～聞いたことあるわ、全国でもトップクラスの天才がうちの学校
にいるつて。

そういうや学年成績順位表でいつも一番上に名前載つてゐるの見たこと
あるね、ちなみに俺は圏外だけど。
しかし俺のイメージと違つた。

こういかにもガリ勉、根暗、陰湿、メガネですつて感じかと思つた
が意外に可愛い、いや会長にも劣らないんじやないか?
あのヤローツラだけはいいんだよな、ファンクラブもあるつて言つ
し……ケツ……！」

「あの、先輩?」

「あ、スマン、ちょっと嫌な奴を思い出しちやつてさ」

「は～嫌な奴ですか?」

「そう嫌な奴、ちょっと聞いてよ」

それから俺はあること無いことを出合つたばかりの彼女に聞かせた。
そんなくだらない話を彼女は笑いながら聞いていた。

「つて訳さ」

「ふふふ、本当にそんな人いるんですか?」

「ああいる、しかも奴は後2回も変身を残しているんだ、由ちゃんも気をつけた方がいいぞ」

「キーンコーン」

「終鈴か、長話に付き合わせて悪かったね
さてと、生徒会室に行くか。

なんだかんだで会長の手伝いをするんだ。

ふつ、俺つて優しいー。

「あの……どこか行かれるんですか？できればもう少しだけお話してくれませんか？」

む、レディーの頼みとあつてはこの英國紳士、断る訳にはいくまい。それに彼女の話は全く聞いていないしな。

会長の頼みは……お嬢様に任せるとか。

「俺ばかり話ちやつたからね、次は由ちゃんの番だね」

「あつ、はい！ありがとうございます」

パツと明るくなつた表情が見れただけでも良しとするか。

会長のお仕置きは……その後甘んじて受けよう。

しかし先程まで笑っていた彼女がいつの間にか真剣な目で真つすぐ見つめてくる。

これはただ事じやなをつだ。

「あの、実は私……クラスで浮いてるんです！！」

……

ええええええええええええ！

いやいやいや、待て、こきなりカミングアウトオ！？

しかもそんな意気込んで言わなくてもいいんじや……

「あ、あは、あはは」

ダメだ、あまりの展開に渴いた笑いしか出ない。

「学年で……いえ、学園でただ一人私だけ優待者つてことでみんな私を避けるんです、それどころか先生すら授業がやりにくそうな顔をして……」

なるほどね、それでここに元居たつて訳か。

浮いていると言つより居づらいつて環境か。

オマケに頼みの先生にすらそんな顔されちゃ、チェックメイトって訳だ。

なるほどなるほど。

「ふふふ、ははは、あ～～あはははあー」

「せ、先輩？」

「ははは、笑わせる…あまい、甘過ぎる、その程度の事でこの一流執事である私を倒そつなどと……片腹痛いわ！…！」

「え？え？え？」

「いいかよく聞け！入学初日、自己紹介時に特技と称し右の鼻の穴からコーヒー豆を！！左の鼻の穴からお湯を注ぎ込み！！口からコーヒーを完成させたああ！！あの時、周りの空気は氷点下マイナス21…！極め付けにお嬢様はこれを朝6杯上手いと言つて飲むと言い切つた（むろん嘘ついた）時のお嬢様の顔は般若と化していだ、これにより今でさえ浮きまくっている俺（性格には俺たち）を差し置いて、浮いているだと？ははははは、よまご言を」

「…………ふふふ、すいません、つい可笑しくって」

よかつた、なんとか笑顔になつてくれたみたいだ。

やつぱり可愛い女の子は笑つてなくちゃね。

「まあそう言つ訳だ、由ちゃんも頑張つてくれ」

「はい！なんだか頑張れそつな気がします、ありがとうございます」

ました

「うん、いい笑顔だ、もしまだ困つたりいつでも力になるよ、さて、そろそろ生徒会室に顔でも出すか。

またうるさく言われるんだろうな…

「あの、も、もしよかつたら、その……また……」

「次は紅茶をご用意致しますよ由お嬢様」

「チャーチス」

……殺氣、恐ろしいまでの殺氣、あの今にも人を殺めそうな目、あ
ればダメでしょ。

「いちよつ、弁解を聞こうかしら？」

いや、あの目はもう何も聞く気は無い目だよね?
完全に射程圏内に入り込んだ獲物だよ。

「……無いのね？」

「これから精一杯やらさせていただきますっ……！」

「……座りなさい、始めるわよ」

ほつ、助かつた。人間素直が一番だよな。

「遅いよ睦月、私も繭ちゃんも心配してたんだよ、特に繭ちゃん
なんてすごい悲しそうな顔してたんだから、いつも睦月に酷いこと
してたから来ないんじやないかって」

「すいません、でも約束は守りますよ」

「遅れて来て私語とはいひ度胸ね」

「す、すいません」

「本当に心配してたんですか？」

「ははは、たぶん」

程なくして3人だけの生徒会会議が開始された。

まさかこの学園で生徒会に入るとは思いもしなかった。

「2人に手伝つてもらいたいのは来月に控えてる文化祭の企画管
理、及び当日の」

「ちょっとタンク、まさか文化祭の管轄も生徒会が受け持つて
いるのか？」

「そうよ、今までだつてそうだつたでしょ？」

「規模がデカ過ぎる、うちの文化祭つていつたらほとんど某有名
ランド並だぞ、それを俺ら3人でやるのか！？」

「 そうなるわね、それに規律により生徒のみの作業になるわ、問題無いでしょ 」

そりやそりや、なんせ超が付く金持ちたちが集まってる学校だ、制限無しなら夢と魔法の某ランドがそのまま引越しして来る。

「 そりやなくとも去年は凄かつた。 」

「 それと今回は使用される金額も定められているわ、これは私たち生徒の知識と工夫が養われるために設けられたものね 」

「 それは余計に荒れるのでは？」

「 だからこそ2人にお願いしたいの 」

「 私たちセレブって感じしないもんね 」

「 少しはセレブとしての自覚を持つて下さい 」

「 今回は2人の力が必要不可欠なの、お願い力を貸して 」

俺たち3人は来年があるが今年で最後の先輩たちもいる。成功させたいってのは分かるが会長も部活で時間が無い、実質2人か……

「 私も出来るだけ時間を取るわ、それでも 」

「 ああ、あまりにも経験が不足している、あと1人、先導出来る奴がいないと 」

「 わかつているわ、けど他の適任者なんて…… 」

「 や待てよ、いるかもしねない。 」

思い出せ、たつた1人だけいる！！俺らに必要な完璧な人材が！！

「 ちょっと待つててくれ、強力な助つ人を連れてくる 」

そう言い残し猛ダッシュ！まだ残っているかもしねない、俺達の希望の星が。

「 まだ居てくれよ 」

辺りを見回すが彼女の姿は見当たらない、やはり帰ってしまったか。

「 あの、どなたかお探しですか？」

後ろから聞き慣れた声がする。

俺が探している人物、たつた数十分前まで話をしていた……

「メン・イン・ブラック、対凶悪宇宙人討伐隊、隊長の上城です、只今、天海由様に水星人である疑いが懸かっています、署までご同行を」

「へ？え？え？」

説明している暇などない、彼女には悪いが犠牲になつて貰つしかない。

ズルズルと彼女を引きずつて行く様はまるで売られてしまつ牛を連想させられる。

ドナドナドーナ。

図書室を後にし生徒会へ向かう。

「あの隊長さん？私は一体どこに連れて行かれるんですか？」

「答えはこの中にある」

問答無用で連行、もとい同行した彼女を生徒会室まで招き入れる。

「一体どこをほつつき歩いて……あら、その子は？」

「紹介しよう、我々に協力すると言ってくれた天海由君だ」

「ええ～～～、わ、私知ってる！！頭のすごく良い子でしょ！？」

「私も聞いたことあるわ、でも彼女、滅多に学校に来ないつて噂があるわよ」

「ふつふつふ、その彼女がどうしても我々を手伝いたいと聞かなくてな、仕方なく連れて来た、由君、自己紹介を」

「は、はい。初めてまして、天海由と申します、これから？よろしくお願いします」

さすがだ、一瞬にしてこの状況を理解したな。

学内一の頭脳は伊達じゃないな。

「本当に彼女が協力してくれるのならすじこわ、睦月お手柄よ、これで文化祭も成功したも当然だわ」

「わーい由ちゃん、これからよろしくね」

なははは、流石は俺、ピンチを見事にひっくり返して見せた。俺すごい！俺最高！！！3人も握手を交わしているし万々歳だ。

「……あの、もしかして会長さんですか？」

「ええ、そうよ、私は御影繭羅、ようこそ生徒会へ」

「あつやつぱりそうなんですか、聞いていた話と全然違つたので気が付きませんでした」

「聞いていた話？」

「はい、なんでも極悪非道の外道で田が合つだけで襲い掛かつて来る野獣だと、そのくせ隊長には負けっぱなしで鼻水垂らしながら謝罪していると」

「……瑞穂、鍵を掛けてくれるかしら」

「えつえ、え、あつ、で、でも隊長のお仕えしている主さんよりはまともだつて言つてましたっ！！」

「……なんて言つてたのかな、その隊長さんは？」

「えつと、とにかくだらしが無くて態度ばかり大きいくせに胸は小さいつて」

「…………へえ」

「その隊長とやら、許せませんね」

……

「いや、待つて！！俺じゃ無い俺じゃ無いんだ、2人とも信じてくれ、由ちゃんきちんと説明するんだ、この人じゃありませんって、この人は良い人ですって、そう言つだけで救われる人間がいる」

「た、隊長？どうしたんですか？」

「オーマイガッ！！」

このタイミングで隊長つて言つちゃダメでしょ。

天然！！恐ろしいまでの天然。

いや、今さら「あつ隊長つて言つちゃった！」みたいな顔いらないから、手を合わせて「ゴメンのポーズとか意味無いから。

「祈りは済んだかしら、鼻水垂らしながらペーぺー謝罪したって
今回ばかりは許さないわ」

「胸が小さくて」「めんねえー、主として出来の悪い執事をきちんと
と更正させなきゃねえー」

「いや、やめてお願い、待ってバットはやめて、死んじやうから、
いや、本当に反省してるからお願い……」

「「問答無用!!」」

ピギャアアアアアアアアアアアアアア

第三章 完

第四章『前日』

過去最高の人材を揃え、迎え撃つは文化祭。

才色兼備の生徒会会長。

御影 蘭羅。

頭脳明晰 パワーブレイン。

天海 由。

パンピー（庶民）代表。

近衛 瑞穂（お嬢様）。

そして……

文武両道、イケメン、学園の人気者で統率力もあり、なんでも出来ちゃう凄腕を持ちながら、それを鼻に掛けないナイスガイ、一枚目の甘いマスクを持つ一流執事。

上城 瞳月。

新生生徒会。

上城瞳月と頼りない仲間達。

その戦いの火ぶたが切つて落とされた。

文化祭まであと5日。

第四章

「この書類に不明な点があるから見直しといで
「この3部田パンピーお願いします」

「飲食系のファイルどこだつたっけ〜?」

「フルルルル」

「はいこちら生徒会、はい！？トラブル！？悪いエリアで揉め事だつてさ、ちょっと行つて来る」

例年どうり急がしい文化祭をまさか自分が取り仕切るとは思つても見なかつた。

しかし学園生徒のスペックは意外だつた。

何にも出来ない金持ち集団かと思つてもいたが意外に出来るヤツらだつた。良い意味で計算外だ。

文化祭まであと4日

「たまにはクラスの手伝いもしないと怒られちゃうからね」

時間が空いたのでお嬢様と見回りを兼て自分らのクラスの手伝いをすることになつた。

「まさかクラスの出し物が参加型流しそうめんになるとは思わなかつたよね」

「クラスのみんなが体験したことが無いって言われた時は異国かと思いましたよ」

結果としてうちの出し物が即決したのは良かったが、任せっきりにしてしまつたのは不安だ。

説明はしつかりしたが、大丈夫だろうか。

「みんな～ごめんね、手伝いに来・・・」

「顔出せなくで悪……えええ～～～！～～～何これ！？」

目の前にそびえ立つ摩訶不思議な竹の造形物。

うちのクラスで一体何が起こつたというのか！～～

果然と立ち尽くしていたらクラスの奴がこっちに向かつて来る。とにかく話しうを聞こいつ、聞いてどうなる問題では既になくなつているがな。

「よお、一通り完成したぜ、試運転もバツチリだ、今から見せるから感想を聞かせてくれ」

そう言って、そうめんをセットする。

そもそもスタートの時点でおかしい。

ピッティングマシーンにセットされたそうめんが開始0・5秒で時速100／kmに達し竹をスライド、そのまま360°回転し、ジャンプ台へ。

そこへ待ち受けていたかのようにカップへと着地、そうめんを乗せたカップが天秤の要領で落下、右往左往と竹を駆け巡つミーチュアサイズのコンベアでまた浮上。

螺旋された竹をグルグル回り分岐点へ、右は観覧車、左はメリーゴーランド。アーチ

合流地点で水中を船で迂回し、ラストでそうめんだけが90°落下、終了。

スタートから終了まで6分37秒かかった。

「ビ〜でキャッチすんだよ！……！」

文化祭まであと3日

「買ひ出しへ戻つてくれてありがとうございます」

「いやいや、重そうに荷物持つてたからね。いつでも戻つてよ
移動途中、由ぢゃんを見かけたので行動を共にしていく。

女性が困つていたら助けるのが紳士つてもんだろ？

「ゆい〜、ちょうど良かつた、力を貸して欲しいの、そこにの冴え
ない顔の人も来て」

「冴えない顔つて、俺のことかな？」

「……友達が大変失礼しました」

氣は進まないが困つていそなので彼女の後に着いて行くことになった。

なにより由ぢゃんがクラスに馴染んで来ていることが嬉しかった。

「チラシのモデルがいなくて困ったのよ、そこで由にモデルを頼みたいの」

「私が！？ むむむ無理だよ」

「いいから、はいっこれに着替えて！－！ それからそここの冴えない

「上城だッ！－！ ゆりしくッ！－！」

日に2回も冴えない、なんて言われとうないわ。

「はいはい、お兄さんはこれね」

どうやら俺らに拍照権は無いようだ。

……着替え終了

「うう～～はずかしいよ～～」

どれどれ、タンクトップにホットパンツ。

それとテンガロンハット。見事なテキサスだ。

良く似合つてるぜ由ちゃん。

「完璧だよ由～～やっぱり私の目に狂いは無かつたね、可愛いすぎだよ～」 「そそ、そんなことないよ、もついいよね？ 着替えていいよね？」

「まだ撮影が終わってないでしょ、お兄さん、まだですかー？」

「今出る」

上半身は裸、緑色のパンツに尖った嘴、頭にはギザギザのついた円形の皿、着てみてわかった……「これはカツパだ！－！」

「……ふつ、あはははは、先輩すごい似合つてます」

「その冴えない顔見た瞬間この人しかいないって思ったのよね」

「全然うれしくね～よッ！－！」

「はい写真とるよ～並んで、これでうちのコスプレ喫茶の売上は

期待できるわ

”カシヤ”

文化祭まであと2日

「大分落ち着いて来たわね」

今日は会長と見回り。

この後に及んで悪巧みをする連中がいると連絡があったのだ。

「いきなりで悪いんだけど明日は予定を空けといてちょうどいい、『理津知学園』の生徒会役員が打ち合わせに来るから総出で迎えるわよ」

『理津知学園』と言えばこの学校とタメを張るぐらいのセレブ校じゃないか。

たしか初日にモニコメントがあるとか言つてたな。

「たしか顔合わせだっけか？会長が相手校の副会長とダンスするんだよな？」

「そうなのよ、正直面倒だわ、それに相手の生徒会長も踊るらしいの、相手をするのは元副会長の坊ちゃん、相当の金持ちだし」あんたが金持ちとか言うなよな……

「誰かあー！…盗撮犯よ、捕まえてーー！」

「あれは写真部だわ、また出たのね」

おいおい何撮つたんだよ。

下着姿なら買う……もとい押収だ。

「ボケつとしないで追つわよ」

「了解ッ」

文化祭まであと1日

「全員揃ってるわね、昨日みんなにも言つたけれど今日は来客があるわ、くれぐれも失礼の無いように、特に睦月！…あなたが一番注意しなさい」

そこまで不安要素は無いはずなんだが……

「これでも一流の執事なんだけどね。」

「うう～なんか緊張します」

「大丈夫だよ、蘭ちゃんがいるから」

「なんつ～人任せな……おつ、来たみたいだぜ」

各自与えられた仕事に取り掛かる。

俺は茶汲み係に任命された。

流石は俺、一流執事、決して戦力外通知をだされた訳ではない。とにかくお茶でも煎れに行くか。

「ようこそ我学院へ、遠路遙々お疲れ様です、私は生徒会長を務めます御影蘭羅と申します、どうぞ御見知りおきを、立ち話もなんですからお掛け下さい」

「ありがとうございます、私は白鳳はくお 憐れんと申します、こちらが副会長の和氣 役、会計の矢九 英、書記の佐部 氣屋羅きやらです、どうぞよろしくお願ひ致しますわ」

「このたびは我が校のモニコメントに参加して頂けると言つ」と
で、こちらがお一方の相手を務めてさせていただきます、そのプロ
フィールをまとめたものです」

顔写真付きの資料が2枚相手に手渡される。
一枚は会長自身の物だ。

おつといけね、ここで俺の出番だつたな。

「どうぞ、よろしければお飲み下さい」

「あら、どうもありが……」

ん、どうした？何か粗相でもあつたか！？
いや無い、完璧なお茶汲みだつたはずだ。

「む……つき？」

「……………あ

「ようやく気付いたようだな低脳が、何故お前がここにいる?」

なんとなく違和感を感じていた。

何か作られたような言い方と声。

無理矢理動かされているような振る舞い。
あまりにも気乗りしないと思える雰囲気。
全て合点がいく。

今居るこいつの全てが作り物。

偽物。

「相変わらずマヌケなツラだな

この忌ま忌ましい感じ。

これが決定打だ。

初め見た時は気付かなかつた。

顔立ちは整い、 同い年とは思えない大人っぽさ。

可愛いと言つより綺麗と言つまつが合つ。

華奢といつかスマートというのか、 多分どちらとも正しいと言える
体型。

目立ち過ぎる長い白髪。

今にして思えば忘れられるはずなかつた。

俺の暗黒時代（孤児院にいた頃）やたら突つ掛かつて来た奴、 いわ
ば同志。

この場合は幼なじみつて言つのか?

まさかこんな所で再開するとは……

正直厄介事になりそうだ。

「申し訳ありませんが、 どなたかと勘違いされてはいませんか?」

満面の笑みで切り返す。

三十八計逃げるが勝ちつてね。

「んなと」うで問題なんか起じてたまるかーー

「相変わらずマヌケ面だな、貴様以上の下等生物を私は知らない」

アサシ

「どうした？顔と頭の他に耳までおかしくなったのか？」

卷之三

「ウガーッ!! 黙つて聞いていればいい気になりやがつて、

面か悪しんはお互し様ぢや二んケガハツト

おはは失礼
彼たまに銀河と交信するもので

本日地面へ2回目のキス。

それで明日を楽しみにしてしまはずれ

「ト、余儀が黙事一終え、阿ジトナア」

ずいぶん傷だらけじゃないかつて？

なぜヤツらが帰った後、会長はボク一派にされ

一
一
一
一
一

俺が無事つたら無事に終わつたんだ。

そ」としておいてくれよ。タバコ

明日が空いよいよ又仕事が問題なく続行れほしいが……

第五章 開催！！

神よ。

なぜ私を見捨てたのですか？

たしかにクリスマスに盆踊りしながら練り歩いたり、おみくじの中身を全部大凶に替えたりとかしました。

たけど、ちゃんと良い子にしてました。

だからって何もこんな仕打ちは無いじゃありませんか。

「で、なぜ？」

「聞くな」

今日ほど運命を呪つたことは無い。

第五章

（開催！！俺らの文化祭）

開催式も終わり、これから自由時間。

本日のメインイベントはなんと言つても舞踏会。

姉妹校であるリツチ学園との懇親会だ。

そのモニコメントの主役と裏方を担当している生徒会は結果として半強制参加となる。

モニコメントまで自由だし、お嬢様に何か奢らせよつ。

ふと視線を上げると前からゆつたりと歩いてくる人物が目に入った。この人込みの中、何かに邪魔される事なく、道を譲る生徒の壁に囲

まれ、まるで平野を歩くように真っ直ぐゅうへりと向かってくる。

「理事長じゃないか……」

マネー学院、最高責任者。
御影 紗耶香理事長。

「睦月君」

向かつて来た先は俺であり、当然話し掛けられる訳で……。

並大抵の生徒なら腰を抜かし、膝が震え、泣きながら脱兎の如く逃げ出すであろう。

だが、俺は違う。

何事にも動じない。

それが俺、一流の執事だ。

「お、おおおお疲れ様でしゅ。とてもすびやらしい演でしゅた」

もう一度言つ。

何事にも動じない。

それが俺。

一流の執事だ。

「ふふふ。そんなにかしこまらなくてもいいのよ
口に手を当てて笑いを堪えている。

どうしよう、ものすごく逃げ出したい。

「文化祭の準備お疲れ様。聞いたわよ、副会長になつたんですね」

そう言つてほつこりと微笑む。

なんとも懐かしい感じだ……。

ここに来て言つが俺はこの学院に入る前から理事長とは顔見知りだつたりする。

暗黒時代（孤児院）によく来てくれては遊んでくれたり、お菓子をくれた。

俺が尊敬する人であり、生涯忘れられない恩人である。

「活躍しているみたいね。元気そうでなによりだわ」
一体いつ活躍したのかは疑問が残る。

自分で思い当たる節が無いのが致命的だ。

むしろ狼藉の数々がバレているんじゃ なかろうか……。

「繭羅は迷惑をかけてないかしら? ほら、あの子少し乱暴じやない?」

ふふふ、とまた笑みを零す。

本当に優しい人なんだよな。

「正直少しどこりでは無いですが、立派な人ですよ。乱暴ではありますけどね」

少しだけおどけて言つてみた。

なんだかんだで昔より余裕がある証拠だと思う。

「ふふふ、大変でしょうけど、これからも頑張つてちょうだいね両手で包まれた手。

温かい。

理事長に……。

紗耶香さんにそんなこと言われたら頑張らない訳にはいかないな。

「任せてくれ。何があつても俺が、俺たち生徒会が力になります。今日のモニメントだって成功させて見せますよ」

「それは楽しみだわ。モニメントでは貴方にも踊つて欲しかつたわ。繭羅も貴方が相手なら喜ぶと思うの、ふふふ」

何となく悪戯な笑みが混じつているような気がした。

「あのジジイさえうるさく言わなければ……」

あからさまに怪訝な顔で嘆息する。

「誰がジジイで、誰がうるさいってえのかの?」

理事長の向かいから腕を組み、生徒の海を真つ一つに裂いた道を進んで来る人物。

『理津知学園』最高責任者
白鳳仁さん。

その後ろにつく生徒会長のレン。

「あらジジイ……」「ホン、学園長、居られたの？」
横田でわざとらしく言つてゐる。

「さつきから居たわい！わざと聞こえたよつて言つておつて」

「お疲れ様です、遠路遙々よくお出で下さりました」

「かしこまらんでもいい、ワシと睦月の仲じやうつて」

ガハハと豪快に笑つてらつしゃる。

これまた言つが、この人も暗黒時代によく来て面倒を見てくれていた。

昔はずいぶん鍛えられたつけかな。

拳法の達人なんだよね仁さん。

そしてこの2人……仲がすぐ悪い。

顔を合わせれば必ず痴話喧嘩が始まる。

考え方を変えてみれば仲が良い証拠かもしれない。

「睦月君、レンちゃん、こんなジジイほつといて、お茶でも飲みに行きましょう」「う

「待たんか、睦月はこれからワシと文化祭を廻るんじや、ババアは引つ込んでれ」

両者睨み合い火花を散らす。

始まつたよ。

2人とも子供っぽい所は変わらないんだよな。

「よろしければ、御二人で廻られたらいかがですか？」

「「それだけは無い」「

理事長室。

最高権利権限保持者の部屋。

もちろん他の施設とは比べものにならないほど豪勢に作られている。そんなゴージャスな部屋……の脇にある古臭い部屋へと招かれた。四畳半のその部屋はちゃぶ台が一つ置いてあるだけの和室。とてもセレブとは掛け離れた異質だった。

「いらっしゃるお茶をするのもいつぶりかしら。懐かしいわね」

「これも何かの縁かのお」

両学園最高責任者に、その学園長の娘であるレン。

誰が見ても異質であり、どう考えても近寄りがたい空間にただ一人、凡人であるこの俺。

事の発端は『せっかくですので私たちど』一緒にお茶でもいかがですか?』とレンの提案から始まった。

「本当に懐かしゅうござります」

さすがはセレブ側に入ったレンだ。

こんな状況に置かれても冷静でいる。

しかし……。

本当に懐かしい。

俺とレンは孤児時代にこの2人に色々お世話になっていた。何を隠そう、俺の引き取り手は理事長だったのだ。これ以上迷惑は掛けられないと丁重にお断りした。正直……。

胸が痛んだ。

俺の通うマネー学院の理事長。

御影 紗耶香さん。

当学院の最高責任者であり、繭羅の叔母にあたる。

俺とレンは理事長に足を向けて寝たことは無い。

「みな元気そうでなによりじゃな」

リツチ学園、学園長。
白凰 仁さん。

拳法の達人であり、俺とレンの師匠にあたる。レンの引き取り手になり、レンを溺愛している。

「お久しぶりです紗耶香わん」

「あら、もう少しひんクに行きましょ、一人とも堅いわよ」

フランクって……。

さすがに無理つす。

もうそんな歳じゃないつすよ。

「……『さんも、お元気そうで何よりです』

「ガハハ、堅いと云つて、睦月なんか無理してますつて顔に出ておるぞ？」堅いって……無茶だろ？

ただでさえ最高責任者の肩書を持つ2人だ、その上、お世話になりまくつたとなれば自然と堅くなるのは当然でしょ？

「レンちゃんはモニコメントで主役を張るのよね？ 楽しみだわ」

「睦月はどうした？なぜ踊らんのだ？」

「私では役不足なので、レン、……さん、には相応しい相手を学院側でご用意致しました」

慣れてない丁寧語に苦戦する。

そのうえ『わん』付けまでとなると少しあしかなくなるのは当然だよ。

「なんじゃつまらん、睦月のダンスが見たかったの。今からでも遅くない、レンと一緒に踊ればよからうに」

「そうね、それがいいわ、すぐ繭羅に連絡してみましょ」

「ちよつ、ちよつと待つて下さい！？ 別に大丈夫ですから、それに繭羅……、さん、にもレン……さんにも迷惑ですし……」

「その通りです、この男が踊れるとは思えません、せいぜい一足歩行が限界かと」

こいつ、この場でよくも……。

「それに私が嫌です、こんな間抜け面と一緒にいたら菌が移りま

す

「レン……さん?」

「間違った事は言つてないぞ? それとも何か? 一足歩行すり出
来無いのか?」

「ははは、御冗談を……おい……」

さすがに言い過ぎだ。

俺だつてダンスの一つや二つ……。

一つや二つ……。

踊れるか?

「ふふふ、相変わらず仲が良いのね、昔は睦月君にべったりだつ
たものね」

「なツ紗耶香さん……? そんな事ありませんツ」

「よし言つわ、何かとあれば、やれ睦月は大丈夫か? やれ睦月
はどうにこるのかと、騒ぎ心配しておつたくせに」

「お父様! ? 何を言つてているんですかツ」

「終いには、うちで迎え入れると言つてだしてな、本氣で睦月を探
しどつたのツ」

「ははは、お優しい事で……」

やべつ。

ちょつと泣きそうになつた……ぐすり。

「あらあら、睦月君も人の事言えないわよ。私の誘いを断つたの
はレンちゃんが心配だつたからでしょ?」

「……誤解です」

「あの時……私の所に来たらレンちゃんが一人になるからと拒ん
だのでしょうか? その頃は「さんが遠方に行つてらしたからね、優し
いのは貴方もよ」

全て御見通しか……。

いつまで経つても、この人達には敵わないな。

幸せって誰つのはじつはいつひとを叫ぶのかもしない。

”ピンポンパンポン”

『緊急連絡、緊急連絡

生徒会役員は大至急生徒会室まで来て下さい。繰り返します

』

緊急と来たか。

運が良い、生徒会室はこの下だ。
すぐに向かえる…

生徒会室に着けば既に全員が揃っていた。
どうやらみんな近くにいたみたいだ。

「これで全員揃ったわね、実はモニコメントで踊るはずだつた奴
が腹を下してトイレに籠城したわ。しかも事もあろうに代役まで一
緒に……」

原因はどうやら理化室で食つたカエルらしい。

あのクソ教師。

文化祭でも教え子を道連れにしたな。

「今から大至急で代役を探します。各自名簿でリストアップして
ちょうだい」

モニコメントまで時間は無い。

学年は問わないものの、それなりの地位と能力、成績が伴っている
奴を探すとなると、どうしても時間がかかる。

今にして思えば、相手はあの『白鳳家』の一人娘だ。
そこらの金持ちなら名を聞いただけで逃げ出す。

だからと言つて間に合わせの相手を当てたとなつたら蘭羅や学園、最悪理事長の評価まで損なわれかねない。

なんとしても探し出さなきや……。

「その必要は無いじやろ」

リストに田を落としていたら聞き慣れた声がする。
まさかとは思うが……。

「学園長！？それに叔母様まで！？」

「『めんなさいね、この人がどうしてもと聞かなくて』
生徒会室に入つて来たのは紛れも無く両学園の最高責任者。
あの二人だつた。

「なに、問題ないじやろ？、それよりほれ、代役はもうそこの
居るでわないか」

視線の先、目が合う俺。

……俺えええ！！！

「な！？ しかし彼では……」

「なに、ワシらが良いと言つておる、問題なかろ？」「
いやいや、ウインクされても困るから！—！

何言い出すのかこの人は！？

早く止めてれ理事長！—！

「問題ありませんわ」

ああ言い切つた——！！

「…………わかりました、では代役は上城睦月で行きます」

こうして鶴の一聲で問題が解決した。

上機嫌で帰つて行く2人が『おもしろくなつた』と小声で話してい
たのは聞き間違いだらう。

ダンスまであと10分。

舞台裏、待合室。

「で、なぜ?」

「聞くな」

綺麗なドレスを纏っているが不機嫌さがヒシヒシと伝わってくる。

「帰るわ」

「待て、気持ちは解る。しかし、ここに帰られると俺が困るんだよ、理事長や『さんに敵前逃亡』されました、なんて伝えられるかッ！」

「なら私に踊れと?」

「……私では『ご不満ですか、レンお嬢様』

「不快だ」

「がいけなかつた！！！」

「どうせ、お父様の意向なのだと、無理に付き合つ必要は無い」

「だが断ることも出来た、それでも引き受けたのは俺の意思だ、世話になつた2人に俺らの成長を見て欲しいんだよ」

「なら一人で勝手にやればいい、私を巻き込むな」

「どれほど嫌われたらそんな素つ気ない答えが返つてくるのだろうか？」

ただ何となく、レンが本気で言つているとは思えなかつた。

「私と踊るなどと、嫌だろ?」

突然何を言い出すのか。

萎んだ花のように輝きが急に失われた。

「失望するのは当然だな。あれほど怪訝していた『こちら側』に私がいるのだから……」

「こちら側……か。

小さ過ぎた俺達は金持ちを、あっち側を憎んでいた。
ただのハつ当たりだ。

自分達の環境が悪いから、周りを憎む。
嫉妬以外のなんでもない。
いざれそんな奴らを見返してやるつて。

絶対幸せになるって、夢見て過ごして来たんだ。

「知つていいや、お前が【夢領学園】のトップにいたこと……」

！……？

「お前は凄いな……。そんなお前の側に居る資格など私には……」

「一人じゃ意味が無い、そうだろ？」

昔の事なんて関係ない。

重要なのは今だ。

「どこに居たかなんて無意味だ。今、どこにいるかだろ？」

今もなお昔の俺達と同じ境遇にいる人が数えきれないほどいる。

人は変わる、変われる。

それを証明しなきゃいけないんだ。

それを学んだ。

「あの2人は常に俺ら2人を気にかけてくれていた、そうだろ？」

住む世界は別々になつた。

それでも本質は変わらないと、あの時の苦痛は忘れてないと、そう思つた。

「俺だけでも無ければ、レンだけでも無い、俺ら2人を愛してくれたじやないか。だから2人で届けよつ、俺らの想いをさ……」

受けた恩は返す。

どれだけ時間が経つても、どれだけ時間がかかるいつも……必ず返す！！

俺達は今、そのスタートラインに立つている。

俺はたまらず手を伸ばした。

「俺と踊るぜレン！！そして見せ付けてやるつ今いる俺達をさ

！……」

差し出した手を力強く握り返していく。

幸せを掴むよう。

一度と離さぬ。

「相変わらず身勝手だな。……どこまでも付き合つてやる」

昔つから何だかんだ言いつつも最後には力貸してくれんだよな。

「足、引っ張んなよレン」「お前が言つなッ……」

久しぶりにレンとタッグを組む。

だつたら……。

「なあレン、ひとつ提案があるんだが……」

「お前の考えは昔から口クな田に会わないので……、こいつ聞いたり

か」

「あのはな、『ハーパーハーパー』

「……ふんひ、いいだらう私に任せとおけ」

良しう……心強い味方から了承が得られた。

これでこそ祭つてもんだろ。

「わざわざ出番ですので準備お願いします」

「成功させるわ」

モードメント会場裏。

前任者が壮大な拍手を背後に帰つてくれる。
さすがは俺らの会長。

完璧に踊りきつて見せた。

『ありがとうございます』としました。続きまして、白鳳様、上城様のダンスをお楽しみ下さい』

司会者の合図で舞台へと移動する。

「皆様、本日は御来場、誠にありがとうございます』レンの挨拶
が始まる。

会場の雰囲気は良子。

理事長と仁さんも一番前に座つている……計画通り。

「突然ですが本日は私たちの他にゲストをお招きしたいと思いま
す」

パツと照明が切り替わる。

ちなみに照明担当はお嬢様と由ちゃん。

携帯ひとつでライトは操れる。

照らし出された先にいるのはもちろん……。

「「紗耶香さん、」「さん。どうぞ舞台へ……」」

ふふふ、ははは、あーーーはっはっはあああーーー。
これぞ、旅は道連れ・大・作・戦！！
ケケケツ、2人とも泡食つてあたふたしてるぜ。
どうせなら一緒に踊つた方が恩返しになるだろつよ。

「計りおつたな」

「ふふふ、やられましたね」

舞台に上がり俺らだけに聞こえるような小声で言つてくれる。
けれど2人共穢やかな顔をしていた。

さあ、ダンスの始まりだ！！

生徒会室。

モニコメントも無事に終わり、俺らの粋なサプライズも成功を收め
た。

戸惑いながらも華麗に踊つていた両学園のトップには驚かされた。
さて、そんな俺に今、最大のピンチが訪れている。

「やつてくれたわね」

簡単に説明しよう。

般若と化した化け物の会長が田の前にいる。ロープで縛られ、タコ殴りにあつたあげく、正座で説教。2分に1回ビンタが飛んで来る。これを1時間。

簡単にまとめると……。

瀕死状態だッ……。

「何を考えているの？ 私に怨みでもあるわけ？」

「いえ、滅相もございませんっ」

ビターネン！！

本日32発目。

残りHP3。

「何故あんな事をしたのかしら？」

何故と言われも困る。

強いて言うのであれば、そこに計らいがあつたとしか言えない。しかしそんなこと言えるはずもなく。

このままでは本当に棺桶に成り兼ねない……。

「そろそろ許してやつてもらえんかのぉ」

「繭羅、やりすぎではないかしら。睦月君が可哀相よ。薄れゆく意識の中、扉を叩いたのは救いの救世主。

「学園長に叔母様……」

当然、この2人の登場には慌てる繭羅。

「私たちは気にしてないわ。むしろ楽しかつわよ

「それにほれ、共犯者もそこに居るしのぉ」

「私は別に、彼が無理矢理……」

「おいレン、きたねーぞ…… めちゃくちゃノリ氣だつたじやね

ーか

「口を慎みなさい。貴方が軽口を叩ける相手では無いはずよ」
くつ、もつともな意見だ。

「まあまあ、睦月君も良かれと思つてやつたのだから・ね」

「…………ました、この件に関しては不問とします」

なんとも歯切れが悪い。

これだけの仕打ちを受けてなお、まだ納得がいきないと呟つのか？

あの人孫とは思えん。

「何か言つたかしら？」

「滅相もない……」

いつして文化祭一日目は幕を閉じた。

明日は2日目。

きっと今日より良い日になるだろつ。
と呟つよつ、なつてくれなきや困るシーー！

第六章 2日目

本格的に盛り上がりを見せる文化祭。

今日が2日目。

朝礼も終わり、全校生徒が動きだす。

行事に没頭する者。

そつちのけで遊ぶ者。

何かわかんない者。

それぞれが今日という日を楽しむために集まり頑張った。

俺だってその一人であることに変わりは無い。

まあ

文化祭を楽しもう

第六章

”ピンポンパンポン”

『迷子のお知らせです。2年E組からお越しの上城睦月君。保護者の方をお待ちしていますので至急エリアBまでお越し下さい。繰り

返し 』

「ブフウウ――――――」

だつ誰だ。

人を勝手に迷子にしてくれた奴はツ――！――

買つたばかりの「コーヒー」が無駄になつたツ――！――。

それに行き交う人々の冷たい目――――。

ものすごく恥ずかしい。

これ以上醜態をさらされるわけにもいかないし――――。

とりあえず田的田まで走る事にした。

* * * * *

「遅いわ」

現在、田の前に見えているのは生徒会メンバーと、大量の具材と熱々の鉄板。

会長の所属する部の模擬店【三連食】だな。

屈強の男どもがエプロンを身につけている姿はなんとも異様な光景だ。

「すいやせんアネさん。野郎供じゃ……」

「大の男が揃いも揃つてつだらし無いわね。いいわ、私たち任せなさい」

繭羅の3倍はある肉体がペロペロと申し訳なさそうに頭を下げる。

周りにいる筋肉派の男たちは直立のままピクリとも動かない。

「アネさん、そろそろ俺が呼び出された訳を聞かせてくれやしませんか?」

なんとなく周りに影響されて口調を変えてみた。

「簡単に説明すると今この店に料理が出来る人がいないのよ」

「なんで模擬店なんか開いたんだ？」

「うちの女子部員がやりたいって言つたらしのよ、ただ……」

どうやら問題は男にあった。

元々武術に特化された護衛執事が料理など出来るはずもない。本来教わりながら店をやっていくはずであった計画が女子の公開試合が急速午前中に繰り上げられたため、女子に総出て出て行かれるという悲劇に見舞われた。

「そういうことだから。私たちで店を回すわよ」

各自の持ち場に着く。

繭羅がタコ焼き、お嬢様がお好み焼き、由ちゃんがレジ係担当となつた。

「さてと、俺は……」

積まれたダンボールに『ヤキソバ』と書かれている。

「焼きそばか……」

隣を見ると既にお嬢様が仕込みに入つてゐる。さすがは庶民代表。

お好み焼きなど朝飯前と言つた感じの手つきだ。

「準備はいいかしら？」

既に匂い釣られて人が集まり初めていた。

「どの店が一番か競争だね」

「皆さん頑張つて下さい」

「しゃーない、負けた奴はあそこでやつてるバンジージャンプつてのでいいな？」

それじゃあー……

『オープン』

「ひして俺たちの売り上げ勝負が幕を上げた。

チーン

「オラオラオラオラオラオラオラオララ————ツ————！」

先頭を切つたのは俺！！

ものすごいスピードでヤキソバを作り上げていぐ。

鉄板王と呼ばれた手捌きで次々と客を捌く！！

「この勝負、もらつたあ————！」

「この学園で一番自由な奴が出店王だよツ————！出店王に、私はなる————！」

続くは、お嬢様。

華麗に繰り出されるその手には龍が見える！！

右手と左手で別々の作業を同時に出来ることから付いた『出店神』の通り名は今だ健在だ。

「これがスーパーマヨラスリーだ————ツ————！」

待たせたな

追うは繭羅。

ここに来てトップに踊り出る。

機械ごとひっくり返す荒業【吸盤返し】は、もはや超人と言わざるを得ない。

勝負は後半に差し掛かった。
互いが均衡している。

由ちゃんがボードに食券を貼付けていく。
ヤバイ、このままじゃ……。
負ける。

「一体こんな所で何をしている?」

「レン……」

「一日目も遊びに来ていたのか。

これは頼もしい助つ人だ。

当時2人で祭を騒がした記憶が蘇る。

「すまない、今は何も言わず手伝ってくれ

「しかたない、見せてやるよ……！……！」

（午前の部、終了）

「♪ヨロロロロ～￥＄%？！#￥！……」

結果として助つ人関入と言う反則で宙を舞つた俺。
売り上げは1位だったのにいいいいいい！！

「とんでもない目にあつた……」

休憩室で一人寂しくコーヒーを煽る。

周りにいた連中はレンとの親睦会とかで、どつか行つてまつた。
なんだよ男子禁制の喫茶店つて、俺だけ抜け者かよ。

「しつかし盛り上がつてんな」

一時はどうなるかなって心配していた。

基本原則が例年と違ううえ、俺達が取り仕切つたんだ。

何もかも初めてで不安もあった。

「これは成功つて事で良いんだよな……」

生徒会結成から今日にいたるまで、日は浅いけれど頑張つたよな、俺たち……。

” ピロロロロロロ ”

着信に『 マコウ 』と出ていた。

いつものイタズラを目的とした呼出しなら携帯など煩わしものは使わないのが蘭羅の主義だ。

緊急時と、そうでないものが呼び出しの仕方でわかる。

実に蘭羅らしい考えだ。

「 もしもし 」

「 今すぐエリヤーに集合よ。わかつたわね 」

” ツーツーツー ”

あつさりした用件だつたな。

とりあえず本日2回目の猛ダッシュだな。

- - - - - * * * * * - - - - -
エリヤー。

駆け付けて見れば生徒会役員が勢揃いしていた。

それとレンもいるのか。

さつきまで一緒にいたのだから当然か。

「時間が無いから簡単に説明するわ。『あれ』を破壊するわよ」

「なんだあれ？」

指指した方向を見れば真っ直ぐ「ひたむきに向かってぐる人影が……。いや、人にしては大きいような……。あれは……。

ロボット？

「見てわからんか？あれはロボだ」

いや、それは判るが何故って事ですよレンさん。

「ロボット研究会が作った自律行動ロボだって。すごいよね、初めて見たよ～」

「2mぐらいありますね。ビームとか出るんでしょうか？」お嬢様と由ちゃんが目を輝かせながら前のめりで興奮していた。たしかにロボを間近で拝めることがなんて滅多にない機会だ。

ただ問題はそこじゃない……。

「あの、なんで君たちはそんなに悠長なの？」

「「「」」」

なんだこの間はツー！

「それがね、ターゲットになつてる人物が決まつてるからなんだよ」

「じうやう怨みを買つたみたいね」

どうやら狙いは決まつているらしい。

それならあのロボの向かう場所も目的も把握できる。

あとは俺達が先回りしてターゲットなつた奴を避難させればいいだけの話だ。

「しかし、ロボ研に恨みをかうとは、とんだマヌケな奴だな。そいつ一体何やらかしたんだ」

「レンさんと仲良く踊つていたとか……」

由ちゃんが「じょじょ」と口ごもる。

確かにあいつの人気はすごかつたな。

男子は当然、女子までも黄色い声援に囲まれていた。

今まで知らなかつたが、こっちのセレブ世界で上手くやつて行けるみたいだ。

しかしあのレンと踊る勇者がいるとは……。

白鳳流の使い手にして仁さんの娘。

命がいくらあつても足りない。

それにあのレンが誰かと踊ることなんて考えられない。

暗黒時代を考えれば当然か……。

誰ひとり信じられなかつた。

今こうして笑えていことが奇跡。

すぐ近くにいた俺でさえ、あいつと踊つたことはこの前が……

……俺かッ！？

「なんで俺呼ばれたの！？隠れるべき人だよねええええ……！」

「他の生徒に被害が及ぶかもしれない。だからだ」

「私はエサですか！？？」

ちくしょう、こうなりやヤケだ！！

ロボだらうが戦車だらうが、かかつて来やがれ！！

「よしッ！！指示を出す。全員俺の盾になれ！！」

……。

「痛いっ痛いっ。ぶたないで。『めんなさい、ごめんなさい』」

……。

「緊急停止ボタンは無いそつよ。止める方法は一つ！！粉碎あるのみッ！！」

「足留めぐらいならできるかも」

「まずは相手を知ることだな。睦月とりあえず突つ込め」

……。

「バカか！？そんな危ないこと出来るかッ！…おい？やめ……押すなつて、ちょっと心の準備がまだつ」

『確認・攻撃開始シマス』

「おおい！！なんか構えてる、構えてるつて。あ、～ちょっと撃たないで、撃たないでええ～」

「あつ逃げた」

『追跡シマス』

「私たちも追うわよ」

とりあえず逃げたはいいが隠れる場所が無い。

この辺一体は封鎖と人払いが済ませてるからな。

危害が他に及ぶから人込みに行く訳にも建物に入ることも出来やしない。

『確認・確認』

「げええッ！？追つて来てるう」

とりあえず武器になるもん探さねーと勝負にもなんねーよ。

武器いー武器いー出て来いー。

おつこれなんて使えんじやねーか？

俺はシャボン玉を手に入れた。

戦闘開始

俺のターン

『ムツキはシャボン玉を吹いた。泡が出た』

ロボのターン

『火炎放射機をセット。放射5秒前』

ムツキは逃げ出した

あかん。

勝負にならへん！！

あんなの喰らつたらボーボボーボーダゼ。

「睦月い～～！！」

「こつちです先輩」

お嬢様と由ちゃんが草むらに隠れてる。

助かつた！！

心強い助つ人（生贊え）発見ッ！！ 最低

「よしッ！！体勢を立て直す。2人とも何か武器になるものは？」

「ん～～ポケットに飴があるぐらいかな」

「ハンドクリームならあります」

『発見・発見』

戦闘開始

俺たちのターン。

『ムツキたちは飴を舐めた。甘かつた』

『ハンドクリームを使つた。スベスベになつた』

口ボのターン

『ロケットランチャーセット。発射5秒前』

ムツキたちは逃げ出した。

だ～～か～～らああ～～。

無理だつて！！

三輪車で高速乗れつて言われて『わかりました』つて爆走出来るか？

無理だろ？

今そんな感じだよ。

「いたわ

「じつちだ、早く来い

結局元の場所に戻つて来てしまつた。

繭羅とレンは待ちくたびれたと言いたそうな顔でじつちを見ている。

「駄目だ。あのロボ武装しすぎだぜ」

「やつきロボ研の人たちから兵器を借りて来たわ」見れば繭羅の手にドライバーが握られている。

「この【極悪睦月撃滅轟魔砲】さえあればロボを破壊することが出来る。だがエネルギー源を最後まで集める時間が無かつた」レンの手には「ミニ袋がぶら下がつていて

正直、兵器の名前は気になるが今は身の安全が最優先だ。

「エネルギーには後何が必要なんだ？」

「洗剤、砂糖、馬油の3つが必要なんだ」

わ～お、ミラクルッ！！

『発見・確認』

戦闘開始

俺のターン。

『ムツキはシャボン玉、飴、ハンドクリームを極悪睦月撃滅轟魔砲にセットした。エネルギー確認100%。穿て！！超電磁撃滅波！！』

まばゆい光がロボを包みこむ。

殲滅成功！！

「よつしやあああーー。」

* * * * *

「壮絶な一日だったな」

「そうだな、だが楽しめた一日ではある。特にお前のアホ面が笑えたぞ」

文化祭も終わり、それぞれが明日に向けて準備を始めている頃。最後ぐらいいしんと2人でゆつくりしなさいと、見送りを申し遣つた時間。

色々と話したい事はある。

たぶんそれはレンも一緒だ。

「今日は楽しかった、ここは素晴らしい場所だな」

「ああ、ここに居て、あいつらと居て、よかつたと想える

本当に恵まれている。

本当に楽しいと感じる。

「そうだな、私にもわかる……」

学校が違えば今後は会いづらくなる。

それは俺もレンもよくわかつている。

お互いがお互いを心配してきた仲間だ。

「もしも……、もしも私が先にお前を……」

小さく震える声は最後まで言おうとはしなかった。

迎えの車に乗り込むレンの背中は何となく寂しそうに見えた。

「あのさ、今後は俺が遊びに行く、そん時は茶ぐらい出せよ

気の利いたセリフなんて俺には似合わないだろう。

このぐらいが俺には。

いや、俺たちには合つてる。

また今度ゆっくり話してもしよう。

こうして俺たちの文化祭2日目は幕を閉じた。

新しい出会いと今までの出会いに感謝。

別れを少し寂しく思いながら生徒会室に戻る。

この別れがそう長くないことを俺はまだ知らなかつた。
そう、あの地獄の最終日が来るまでは……。

第六章 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290x/>

ド三流!!

2011年11月20日05時38分発行